

第4分科会「里山と信仰」

シンポジウム「里山の神様との交わり！」

日時：2006年4月22日（土）13:20～17:00

場所：千葉県立中央博物館 講堂

参加者：65名



趣旨

里山の生き物がざわめく春、里人達も稲作にかかる。「今年も良い米ができますように・・・。」里人たちは人知を 超えた自然の力に届くよう祈りつつ働く。ことあるごとに里人は、暮らしを守って下さる神さま、時には生命をも脅かす神さまにも畏敬の念を込めて祈った。そのような八百万神の信仰・文化から、今、私たち現代人が学び伝えられるべきことは何なのか？里山の神さまの意義を語り合い、感じ、考えました。

講演1「里山の神さまを訪ねて」 ケビン・ショート（東京情報大学教授、ナチュラリスト）

人の暮らしと自然の境界を考える学問体系に「人間生態学(Human Ecology)」というものがある。かつて日本人は、集落の入口や道の分岐点等には道祖神やお地蔵様といった石仏を奉り、神聖な場所として木を植えて礼拝した。また、集落の中には寺社を奉り、そこには鎮守の森を育み、守ってきた。時代が移り集落の暮らしが変わり宅地開発を行っても、それらの木々は恐らく一番最後まで切られずに残る。そうして何百年も経った時、鎮守の森等は生き物の棲家となり、里山の自然が形成されていく。道祖神等と同じように、日本人は田畑や集落を潤す泉には水神を奉って敬ってきた。このような水神信仰は、イギリスやアイルランドのケルト人にもあり、「アイルランドの聖なる井戸(Fish stone water holy wells of Ireland)」という書籍が出版されているし、泉に硬貨を投げ入れる習慣は今も欧州各地に残っている。

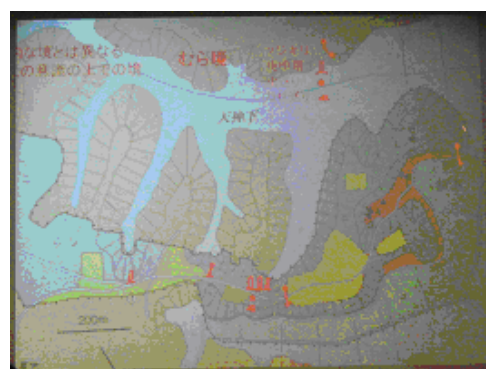


このような里山と民間信仰の関わりを考えた時、人の暮らしと自然、精神文化の境界を扱う学問として「精神生態学(Spiritual Ecology)」という考え方に思いついた。民間信仰とは、自然を畏れる心から生まれるが、この心は「自然の恵みに対する尊敬」と「祟りに対するタブー」が相俟ったもので、自然保護の原点だと言えよう。

講演2「むらの中の聖なる場所・異界との接点：歴史地理学の立場から」

白井 豊（千葉県立中央博物館 環境教育研究科長）

県立中央博物館の常設展示「自然と人間のかかわり」では、谷津田に沿ったむらとして、印旛郡本埴村物木を紹介している。里山を考える参考として、物木を例に近世以来のむらの在り方を述べる。自然が人間集団の力をはるかに凌いでいた時代、集落(ムラ)は、日照や水の便、風当たりなどを考慮し地形に応じて設けられた。集落(ムラ)、耕地(ノラ)、林野(ヤマ)からなる村落(むら)に住む人々は、道に沿った意識上の境の場所(例えばノラとヤマの境など)で辻切りなどの年中行事を行っていた。



庚申塔などの石仏が造立される場所もそうした境の位置であった。限られたむらのなかで、林野はよく管理されていた。下総台地では近世中期以降、薪炭林としての松林が多かったが、下草刈りや落ち葉掻きが丹念になされ、肥料、燃料となっていた。

今日では神社の周囲が広く照葉樹林に覆われているが、それは管理が停止されて以降、顕著になったものと新たな研究が小椋純一らによってなされている。むら人達は鎮守の社に豊作と無事を祈ってきたが、神社に対する気持ちは、特定の神に対する深い宗教心というよりは、むら共同体社会への連帯の精神であったと考える。また、むらの社会には、世代や性別毎に共通の願いをこめて行われるいくつかの講があった。子どもたちの天神講、年寄りたちの念仏講など消滅したこれらの講のなかには、効率を優先しすぎた今日の社会において、人と人とのつながりや精神的な面では代償が必要となるものもあるのではなかろうか。

講演3 「里山における神さまの意義」

中村 俊彦（千葉県立中央博物館 副館長）

信仰に基づく自然保護が残っているのは、世界でも日本だけと言われる。水神は水と水源の林を守る。庚申塔、大蛇や大男を想像させる大わらじを集落の入口に奉る辻切は、ここから先は勝手に入るなどという意志が示され、ムラを守る。台座に見猿・聞か猿・言わ猿の三猿が彫られた青面顔金剛像もムラ社会のプライバシー保護の象徴だと解釈される。かつては韓国の集落の入口にも天下大(男)将軍・地下大(女)将軍が奉られていたが、これも境(塞)の神だ。

千葉県長柄町の横穴式古墳の壁面にトキとヤマセミと思われる壁面を発見した。日本書紀や古事記には、日本にも鳥葬の習慣があったことが記されている。里やまを象徴するトキは、死者の魂を天に運ぶ信仰の印と思われるし、横穴を住处とするヤマセミもトキと同じ横穴古墳の死者の魂を運ぶと考えられていたのであろう。

このように「鳥」は「鳥居」に通じ、ムラ社会と神の世界を結ぶ象徴でもあった。今でも大切な所に神様を奉るとゴミが捨てられ難くなるのは、公共心と信仰心には相通じるものがある。このような里やまの信仰は、昔から土地の人々にとっては、心の拠所であるばかりか、学びの情報伝達装置や助け合いの象徴でもあった。今の私達にとって、いにしへの自然環境・生活文化と歴史を知ると共に、人と自然の調和・共存の有り様を学ぶ場所にもなっている。このような、日本の先人の信仰を知るとは、人と自然の調和・共存の姿を学ぶことでもあり、信仰のなかには、人・自然・文化を融合させた新たな学問領域の可能性が秘められている。



里やまにおける神様の意義

1. 昔からの土地の人々にとって
 - ・人々の心のよりどころ
 - ・学びの情報伝達装置
 - ・助け合いのシンボル
2. 今の私たちにとって
 - ・かつての自然環境・生活文化と歴史を知る
 - ・人と自然の調和・共存の有り様を学ぶ

語り合い「里山における神さまの役割分担・意義」

司会：鈴木 優子(下泉・森のサミット)

ケビン・ショート、白井 豊、中村俊彦

1. 日本の里山文化とはインドの土着信仰が米作や仏教とともに渡来して、古代日本の土着信仰と融合してできた独特の文化である。

2. 道祖神や庚申塔等の石仏類とは芸術品や単純な信仰対象ではなく、何らかのタブーを意味しているのだから、その場所にある意味を良く考えて配慮すべきで、石碑の表面に彫られた像だけではなく、側面や裏面に刻まれた建立の時期や建立者名も重要である。

3. 民間信仰とは、地域の自然と社会とを存続させていく上での重要な事項を抽出したものである。



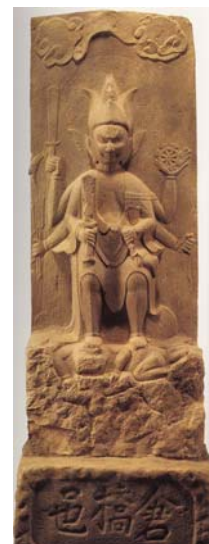
結果

里山に奉られた庚申塔、氏神、道祖神、弁財天、水神、山の神、田の神、稲荷、辻切りなどの神様信仰の意義を再考し、今の私たちへのメッセージを解き明かす必要がある。

里山の信仰は、自然と人の暮らしとの「境」を示し、神聖とするスピリチュアル・エコロジーであり、①自然との共存、②公共心、③共同体の存続への願い、が込められているものであり、今の私たちにとって、人と自然の有り様を学ぶことができた。

まとめ

「里山にゴミを捨てたら、タタリがある！」



庚申塔 千葉県立中央博物館図録より